

I-1 ヒンジが橋梁の衝撃に与える影響について

京都大学工学部 正員 山田 善一
○ 金沢大学工学部 正員 小坂 為雄

従来ヒンジを有する橋梁とは、ゲルバー桁橋等とは振動の多い構造とされてきた。これには多くの理由があろうが、最も大きいものの一つは、移動荷重がヒンジを通過する際の荷重の運動量の急激な変化による衝撃作用が大きな要素である。本研究ではこれら作用を究明する為、Fig. 1 に示すような両端固定で中央にヒンジを有し、 EI 一定の桁上を m_1 なる質量を有する荷重が v なる速度で移動する場合について究明する。

さて、われわれは動的撓み y を、基準関数 ϕ_n と一般座標 q_n によって表わされるものとす

る。

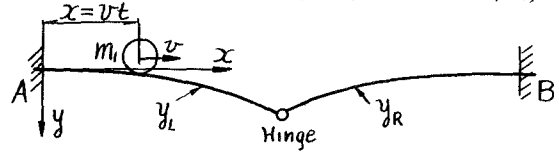


Fig. 1

$$y_L = \sum_{n=1}^{\infty} q_n(t) \phi_n(vt) \phi_n(x), \quad y_R = \sum_{n=1}^{\infty} q_n(t) \phi_{Rn}(vt) \phi_{Rn}(x) \quad \text{--- (a)}$$

$$\phi_{Ln}(x) = \cosh \beta_n x - \cos \beta_n x - \alpha_n (\sinh \beta_n x - \sin \beta_n x) \quad \text{--- (b)}$$

$$\phi_{Rn}(x) = \cosh \beta_n (2l - x) - \cos \beta_n (2l - x) - \alpha_n (\sinh \beta_n (2l - x) - \sin \beta_n (2l - x)) \quad \text{--- (b)}$$

ボールが A より v なる一定速度で移動するときの桁の振動を次の段階にわけて解析する

(i) ボールがヒンジの左桁上にある場合

Fig. 2 に示されるような状態でのボールの釣合式は

$$m_1 \frac{d^2 Y}{dt^2} \cos \theta + N - m_1 g \cos \theta = 0 \quad (N \text{ 方向}) \quad \text{--- (c)}$$

$$m_1 \frac{d^2 Y}{dt^2} \sin \theta - m_1 g \sin \theta = 0 \quad (\text{接線方向})$$

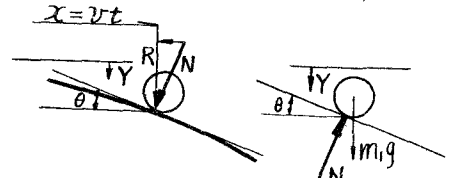


Fig. 2

となり $\theta = (\frac{\partial y}{\partial x})_{x=vt}$ は非常に小さいとして、 $\sin \theta \approx 0$ より

$$\text{式(c)は、} \quad R = -m_1 \frac{d^2 Y}{dt^2} + m_1 g \quad \text{--- (d)}$$

ここに、 Y はボールが $x=0$ にある時の重心の位置を $Y=0$ とした場合のボールの重心の変位、 m_1 はボールの質量、 R はボールが桁上をよぶ圧力であり、また桁がボールをよぶ反力でもある。いまボールが桁の $x=vt$ の点にある時の桁の撓み曲線 y は、式(a)で

表わされる。この場合、運動のエネルギー T と位置のエネルギー V は

$$T = \frac{1}{2} \int_0^{2l} m \left(\frac{dy}{dt} \right)^2 dx = m l \left[\sum_{n=1}^{\infty} \dot{q}_n^2 \phi_n^2(vt) + 2(\beta_n v) \dot{q}_n \phi_n(vt) \phi_n'(vt) + (\beta_n v)^2 \dot{q}_n^2 \phi_n^2(vt) \right] \quad \text{--- (e)}$$

$$V = \frac{1}{2} EI \int_0^{2l} \left(\frac{d^2 y}{dx^2} \right)^2 dx = \frac{1}{2} EI \sum_{n=1}^{\infty} \dot{q}_n^2 \int_0^{2l} \phi_n^2(x) \beta_n^4 dx = 2 \sum_{n=1}^{\infty} \beta_n^4 EI \dot{q}_n^2 \phi_n^2(vt)$$

ラグランジュの運動方程式

$$\frac{d}{dt} \left(\frac{\partial T}{\partial \dot{q}_n} \right) - \frac{\partial T}{\partial q_n} + \frac{\partial V}{\partial q_n} = Q_n \quad \text{--- (f)}$$

は、一般力 Q_n に $Q_n = R \phi_n'(vt) = (m_1 g - m_1 \frac{d^2 Y}{dt^2}) \phi_n'(vt)$ を用い、さらに次のパラメーター α , R_1 , および記号 Δ_0 , $\bar{q}_n$, τ を用いるとこの系の運動方程式は次のようになる。

$$\text{速度パラメーター } \alpha = \frac{v}{l} \sqrt{\frac{\Delta_0}{g}}, \quad \text{重量パラメーター } R_1 = \frac{m_1}{2m l}$$

$$\Delta_0 = \frac{m_1 g l^3}{6EI}, \quad \bar{q}_n = q_n / \Delta_0, \quad \tau = \frac{vt}{l}, \quad k_n = \beta_n l$$

$$(1 + R_1 \phi_n^2) \frac{d^2 \bar{q}_n}{d\tau^2} + 2k_n \frac{d\bar{q}_n}{d\tau} (1 + 2R_1 \phi_n^2) \frac{d\bar{q}_n}{d\tau} + \left\{ k_n^2 \frac{d^2 \bar{q}_n}{d\tau^2} (1 + 2R_1 \phi_n^2) + \frac{R_1 k_n^4}{3\alpha^2} + 2k_n^2 \left(\frac{d\bar{q}_n}{d\tau} \right)^2 \right\} \bar{q}_n \\ = R_1 / \alpha^2 - R_1 \sum_{i=1}^{\infty} \left[\frac{d^2 \bar{q}_i}{d\tau^2} + 4k_i \frac{d\bar{q}_i}{d\tau} \frac{d\bar{q}_i}{d\tau} + 2k_i^2 \frac{d^2 \bar{q}_i}{d\tau^2} \bar{q}_i + 2k_i^2 \frac{d\bar{q}_i}{d\tau} \bar{q}_i \right] \phi_i^2 \quad \text{--- (g)}$$

式(8)よりボールがヒンジに達した時の y および y' は求められる。

(ii) ボールがヒンジに達した時の衝撃作用について。

さて、我々は、ボールが衝撃を与える直前の時刻を $t'=0$ として、式(8)で求めた撓み y_L 、 y_R 、 $\frac{dy_L}{dx}$ 、 $\frac{dy_R}{dx}$ 垂直方向の速度 $\frac{dy}{dt}$ を初期値として方程式を導く。ボールが衝撃作用を及ぼす直前のヒンジ部の桁の形状は、Fig.3のようであると考えらる。この状態は、パラメータ θ_1 、 θ_2 によって定まるのであるが、一般に荷重による撓みの影響が大きいと考えらるるので今回はこの状態について研究を進める。

ボールが右桁先端に衝突する場合衝撃力は桁の軸線に対して直角方向と接線方向に分割できる。この時接線方向には摩擦を無視すれば抗力はないので接線方向の速度変化はない。

またボールの直角方向の変位を Y とすれば、反力 F は $m\ddot{Y}=F(t)$ 、これより $\dot{Y}=\frac{1}{m}\int_0^{t'} F(t')dt'$ のとき、後のボールの速度 V' は $V'=V_0-\frac{1}{m}\int_0^{t'} F(t')dt'$ さらに、 $t'=t$ 後のボールの変位 Y は

$$Y=V_0 t - \int_0^t \frac{dt'}{m} \int_0^{t'} F(t') dt' = V \sin(\theta_1 + \theta_2) \cdot t - \int_0^t \frac{dt'}{m} \int_0^{t'} F(t') dt' \quad \text{--- (h)}$$

一方接線方向の変位 C は、 $C=V \cos(\theta_1 + \theta_2) \cdot t$ ボールの垂直方向の変位 d は、

$$d=[V \sin(\theta_1 + \theta_2) \cdot t - \int_0^t \frac{dt'}{m} \int_0^{t'} F(t') dt'] \cos \theta_2 - V \cos(\theta_1 + \theta_2) \cdot t \cdot \sin \theta_2 \quad \text{--- (i)}$$

ボールの水平方向の変位 δ は

$$\delta = V \cos(\theta_1 + \theta_2) \cdot t \cdot \cos \theta_2 + [V \sin(\theta_1 + \theta_2) \cdot t - \int_0^t \frac{dt'}{m} \int_0^{t'} F(t') dt'] \sin \theta_2 \quad \text{--- (j)}$$

ところで桁には $x=l$ の点で垂直方向に $F(t) \cos \theta_2$ 、水平方向に $F(t) \sin \theta_2$ の力が加えられることになる。この場合の運動方程式を立てる。まず、垂直方向に対して、 $y = \sum_{n=1}^{\infty} \tilde{g}_n \phi_{n(x)} \quad \text{--- (k)}$ とする。一般に2つのエネルギー T 、 V と外力 $f(t)$ との間に次の関係が成立する。

$$\frac{d}{dt}(T+V) = f(t) \frac{\partial y}{\partial t} \quad \text{--- (l)}$$

この式を式(e)、(k)を用いて書きあらわすと、運動方程式は次のようになる。

$$\ddot{\tilde{g}}_n + \omega_n^2 \tilde{g}_n = \frac{1}{2m} F(t) \cos \theta_2 (\phi_n'_{(x=l)}) \quad \text{--- (m)}$$

ここに、 $\omega_n^2 = \frac{EI \beta_n^4}{m}$ 、 $\theta_2 = (\frac{\partial y_R}{\partial x})_{x=l}$ である。そこで、衝撃力 $F(t) \cos \theta_2$ による桁のヒンジ部の垂直変位と、ボールの垂直変位 d とは、 $F(t)$ が作用している間等しいはずであるから

$$y_{(x=l)} - y_{(x=0)} = \sum_{n=1}^{\infty} \tilde{g}_n (\phi_{n(x)})_{x=l} - \sum_{n=1}^{\infty} \tilde{g}_n \phi_{n(x=l)} \phi_{n(x=0)} = d \quad \text{--- (n)}$$

同様に水平方向の衝撃力 $F(t) \sin \theta_2$ に対しては、 $y = \sum_{n=1}^{\infty} \tilde{g}_n \phi_{n(x)}$ とし式(l)、(n)は、それぞれ

$$\frac{d}{dt}(T+V) = M(t) (\frac{\partial^2 y}{\partial t \partial x})_{x=l} = p(t) \dot{X}(t) = F(t) \sin \theta_2 \dot{X}(t) \quad \text{--- (o)}$$

$$\dot{X}(t) = \frac{d}{dt} \int_0^l dx (1 - \cos \theta) \div \frac{d}{dt} \int_0^l dx \frac{\partial y}{\partial x} \div \frac{d}{dt} \int_0^l \frac{1}{2} (\frac{\partial y}{\partial x})^2 dx = 2 \beta_n l \dot{\tilde{g}}_n \quad \text{--- (p)}$$

$$\ddot{\tilde{g}}_n + \omega_n^2 \tilde{g}_n = \frac{\beta_n}{m} F(t) \sin \theta_2 \cdot \tilde{g}_n \quad \text{--- (q)}$$

これより、水平方向の変位 $X(t)$ を求め、これがボールの水平方向変位 δ と等しくなる。

$$X(t) = \int_0^l dx (1 - \cos \theta) \div \int_0^l \frac{1}{2} (\frac{\partial y}{\partial x})^2 dx = \sum_{n=1}^{\infty} \beta_n l \tilde{g}_n = \delta \quad \text{--- (r)}$$

以上より式(n)、(r)、を満足するよう $F(t)$ 、 $y(t)$ を定める。

